
初恋終時・改

舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋終時・改

【Zマーク】

Z9241Y

【作者名】

舞

【あらすじ】

初めての恋が終わる時の書き直し版です。

前の消そうと思つたんだけど、消すのはサイトに良くないみたいなので、消すのやめて新しく書きました。

平次が「ちょっと東京に行つて来る」と言つて出掛け一ヶ月が経とつとしていた。

「服部、何しに行つたんやろなあ？」

「分からん。電話も繋がらんし・・・自分が受験生やつてこと忘れどるわ絶対！」

平次が東京に行つてから連絡が取れなくなり、アタシは平次の事が心配で何もかも手に付かなくなつていた。

授業も聞く気にならず、ボーッと窓の外を眺めていたら、携帯の呼び出し音が聞こえてきた。

「いひー授業中は切つておきなさいー。」

先生が何か言つていたけど、そんなのお構いなしに電話に出た。それが平次専用の着信音やつたからや。

「もしもし? 平次? あんた何やつてんの! ?」

『和葉・・・・・。今直ぐ、東京に来い・・・・・。』

「えつ・・・・?」

怒ろうとしたけど、直ぐに怒れなくなつてしまつた。平次の声に元気がなかつたから。

「どしたん? なんかあつたん?」

『いいから、東京に来てくれ・・・・。』

「・・・分かつた・・・。」

早退し、急いで準備をして東京に向かった。

東京に着いて言っていた住所にたどり着いた。その家の表札には、工藤つて書いてあった。

ピンポン

「来たか・・・。」

包帯や絆創膏だらけの平次が中から出てきた。

「平次・・・・・。」

想像以上の平次の元気の無さにどうしたらいいのか分からなくなってしまった。

「平次・・・・・。」

「怪我なんか治るからどうでもえんや・・・。」

「どうでもつて・・・。」

「工藤はもう、帰つて来んのやから・・・。」

平次の表情から言葉の意味が分かつて、黙り込んでしまった。

「ちゃんと制服持つて來たか?」

「う、うん・・・・。」

やつぱり、そういうことやね・・・・。

【あと、制服持つて來いよ。】

昨日の電話で平次が制服を持って来いと言つたのは、工藤君のお葬式があるからや。

お葬式の準備は出来ていたらしくて、直ぐに向かうことになった。その間、アタシも平次も一言も話さなかつた。

平次はずつと黙つたまま。泣き崩れる蘭ちゃんたち。アタシは状況が呑み込めずにいた。

やつてそこに新一君の姿が何処にもなかつたから・・・。

工藤君が居るはずのところに、コナン君がいた。

「平次・・・その・・・・・。」

アタシにはなんで工藤君やなくて、コナン君が居るんか分からんかった。

平次はアタシが何を言おうとしたのかが分かつたのか、話出した。

「江戸川コナンは工藤新一やつたんや・・・。」

「・・・・それってどうじうこと?」

平次の話やと、コナン君と哀ちゃんはある組織の薬で体が小さくなつた工藤新一君と宮野志保さんやつたらしい。そしてその組織を潰そうとしたときに、撃たれて工藤君は亡くなつたらしい。平次はオレのせいやつて言つてた。アタシにはその場の状況が分からんから、なんで平次が自分を責めてるんか分からんかった。やから何も言つてあげれんかった・・・。

「平次・・・・・。」

平次は目を合わせてくれなかつた。

平次の隣で何も出来ずにいたら、哀ちゃんが話し掛けてくれた。

「貴方、何があつたか知りたいんじゃない?」
「うん・・・。」

哀ちゃんについて、人気のないとこに来た。

「・・・工藤君は服部君を庇つて撃たれたの。」

「平次を・・・？」

「そ、う、服部君が奴らに見つかってね。撃たれそうになつたのを工藤君が庇つて・・・。」

「そ、うやつたんや・・・。」

「彼、撃たれて直ぐに言つてたわ。」

【工藤つ！】なんでオレなんか庇うんや！】

【おめえ・・・大事にしなきや・・・いけねえもの・・・ちやんと守
れよ・・・。】

【工藤！】

「きつと工藤君、貴方のこと言つてたのよ。」

「アタシ？・・・・・・アタシが電話したからかな・・・？」

「電話？」

「うん。この前な、蘭ちゃん家に電話したんやナビコナン君が出て
ん。」

【平次に一ちゃんが、そんなこと・・・】

【アホやねアタシ・・・。平次がアタシのこと見て無いんなんか前から分かつたのに・・・。】

【和葉ねーちゃん・・・。】

【「めんな。今日の」とは忘れて・・・。】

「アタシが電話で平次のことを言ったから、平次が死なないようになつて・・・。」

「貴方のせいじゃないわよ。彼は彼の意思で服部君を庇つたの。」

「うん・・・。」

「あの・・・組織はどうなつたん?」「警察の力もあつて、崩壊したわ。」「そつか・・・。」「でも工藤君の死は大きすぎる代償だつたけどね。」「・・・。」

蘭ちゃん、平次・・・大丈夫かな?アタシには何が出来るだらつ・・・。

蘭ちゃんはずつと泣いていた。新一君と最期のお別れをした後も、蘭ちゃんの涙が止まる」とは無かつた。

「和葉ちゃん……。新一になくなつちやたよ……。コナン君も……わたし、独りぼつちだよ……。」

「蘭ちゃん……。」

今は何を言つても違つ氣がして、蘭ちゃんに言える事はアタシには何もなかつた……。それは平次にも同じやつた……。

平次とアタシは蘭ちゃん家に泊めてもらつことになつてた。蘭ちゃんは家に帰ると部屋に閉じこもつて出てこなかつた。

平次は蘭ちゃんの部屋の前で立つていた。アタシはその様子を少し遠くから見ていた。

「ねーちゃん……。工藤のことやけど……。」

「何?」

「ほんまに悪い……。オレがあの時」

「謝らないで!……。謝られても、新一は歸つて来ないんだから!」

「…」

「やうやな……。」

辛そうな平次の顔を見て、泣きそうになつた。でも泣きたいはずの平次が泣いていないので、アタシがここで泣いちゃ駄目やと思つた。

「蘭ちゃん、話があるんやけど……。開けてくれん?」
「何?」

「ドアの向い側で蘭ちゃんが小さな声で返事をしてくれた。

「アタシ、ひょっと前にコナン君と電話で話したねん……。」

少しそうると、ドアが開いて蘭ちゃんが中に入ってくれた。
アタシは電話の内容を話した。

【せつと平次に一矢を報復してたけど、ほんとは心配なのが強がりやつて、そんなこと言つたんだよ。】

【なんでコナン君は分かるん?】

【・・オレも一緒にだから・・・。】

【へ?】

【オレも強がってほんとの気持ち伝えられてないから・・・。】

「最初は歩美ちゃんのこと言つとるんやと思つてたけど、蘭ちゃんのことやつたんやね。工藤君、蘭ちゃんのこと」

「そんな・・・・・和葉ちゃんが服部君のこと言つたから・・・だから新一は服部君を庇つて・・・。」

「・・・・・・・・・。」

何も言えなかつた。哀ちゃんはちやうつて言つたけど、アタシもそんな気がしてたから。

「ねえ、和葉ちゃん？・・・服部君わたしにちょうどいい？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9241y/>

初恋終時・改

2011年11月29日19時53分発行